

新美南吉童話論

——「張紅倫」について——

一

三十歳の若さでその短い生涯を終えた新美南吉の文学的出発は、何歳の頃からであったのだろうか。小学校の卒業式の際、答辞の中に「たんぽぽの幾日ふまれて今日の花」といった句を織り込んでいるところから^(注1)、相当早くから文学的なものに寄せる関心があったように見られるが、今日われわれの知るところでは、遅くとも、南吉十四歳（昭和三年）^(注2)の時には、既に文学の創作活動が始まっていたと考えても間違いないようである。ところで、昭和四年の南吉の日記には次のような記述が見られる。以下、引用の日記および作品の本文は『校定新美南吉全集』（大日本図書刊）に拠った。

（昭和四年）二月十三日（水）風

「日本童話集」を梶田に返した。二時間目の時、学校へ野砲が来たので見学した。空砲を二発うった。余の耳をつめてゐたのは勿論である。兵士を材料として、一つ童話でも作らうか。

四月二十二日（火）

記憶すべき事でも、こんな物は何でもない事だと思つてゐると忘れて了ふ。昨日、「少佐と支那人の話」を書き出した事を書き記すの

を忘れて了つた。

五月三日（金）雨

（前略）「少佐と支那人の話」を書きあげた。[△]「古井戸に落ちた少佐」と改題。夜、弟にそれと、「紫の花」を読むで聞かせた。

五月四日（土）

（前略）久米と非常に仲がよくなつた事を知つた。学校がひけてから、彼と連立つて、小学校へ行き、余の作品を見せてやつた。彼も文学の方へ進むんださうだ。昨日脱稿した「古井戸に落ちた少佐」を彼は非常に感心してゐた。彼は、余の作品を全部持つて行つた。

右に引用した日記からすると、南吉は、昭和四年当時、既に童話を執筆していたことは明らかである。もっとも、^(注3)論証の根拠を日記に求めることは、久米常民氏の指摘と警告があるように、南吉の日記は、いわゆる事実を列記した日記と峻別されるべき特質を備えていることからすると、危険が伴わないわけでもない。けれども、昭和四年の日記の巻末に記された創作一覧表の中に「少佐と支那人の話」があり、作品の完成を示すと思われる枠組みの記号が付されていることからすると、『校定新美南吉全集』の解題に記すように、四月二十一日以前に「少佐と支那人の話」の着想と題名が決まっていたものと判断される。そして、作品を

竹 尾 利 夫

書き上げた後、完成を示す枠組みの記号が入れられたものと考えられる。したがって、右のような日記の記述は信用しても間違いはあるまい。

さて、南吉は日記によると、創作に際しては、その作品を必ず他人に読んで聞かせて、その反響を確かめていたようである。殊に彼が教職にあった当時は、自作の童話作品などをよく生徒に読んで聞かせていたようだ。その作品の読み聞かせの必要性については、彼の童話理論である「童話に於ける物語性の喪失」（昭和十六年十一月二十六日、早稲田大学新聞に掲載）の中で、次のように述べている。

「詩と真実」によればゲーテもまた作品を読み聞かせる習慣を尊んだやうである。これらのすぐれた文士達は、かうして、文体の簡潔、明快、生新さ、内容の面白さを失はぬやうに努めた。これは昔風な馬鹿正直なやり方のやうに見える。しかし、今日、童話が物語性を再び身につけるには、少しでも話の内容なり文章なりが退屈になれず、聴手がごそごそはじめるので全然作家のひとりよがりやを許さない。この厳しい方法が最もよいと思ふ。

南吉が作品の推敲に際して、身近な人々に自作を読んで聞かせていたのは、右の童話理論に説くところの「物語性」を失うことに対する危惧としてであったようである。谷悦子氏によれば、南吉の「物語性」とは、「文体の簡潔、明快、生新さ、内容の面白さ」などであって、一般に理解されているところの「ストーリー性」とは別物であるという^{（注4）}。もっとも、そうした物語性が南吉の作品においてどのように検証され得るかは、今後の検討にまたなくてはならないだろうが、本稿で考察するところの作品「張紅倫」では、後述するように、古井戸に落ちる少佐といったパロディ性に、南吉の説く「物語性」が指摘できるように思われる。

このように、南吉の周囲にあった人々は、早くから彼の作品に接して

いたわけであるが、この日記中に見られる「古井戸に落ちた少佐」が、はじめて活字となって人々の目に触れたのは、雑誌「赤い鳥」（昭和六年十一月号）によってであった。

「赤い鳥」は鈴木三重吉によって大正七年に七月号を創刊号として発刊され、日本児童文学史上大きな意義をもつ雑誌である。有島武郎、芥川龍之介、北原白秋らの当時の文壇作家を数多く起用し、童話、童謡といった、この時代の他の児童文学雑誌には見ることの少ないジャンルを開拓し、後の日本児童文学に大きな影響を与えた。また、童話、童謡などの投稿を認めたため、特に昭和六年の復刊後は、多くの新人作家が誕生した。新美南吉もそのひとりであったわけである。

南吉の投稿作品が「赤い鳥」に掲載されたのは、昭和六年五月号の童謡「窓」が最初で、この後、昭和八年四月号まで彼の作品はほとんど毎号掲載されている。そして、童話四篇、童謡二十三篇が掲載され、本稿に扱う童話「張紅倫」は、「正坊とクロ」（昭和六年八月号）に次ぐ、第二作目の童話である。

さて、初め「少佐と支那人の話」と題して、昭和四年四月二十一日に執筆が始まり、五月三日に脱稿して「古井戸に落ちた少佐」と改題された作品が、いつ「赤い鳥」に投稿されたものか、投稿時の題名が何であったのかは定かでない。けれども、「赤い鳥」に掲載された作品では「張紅倫」と題されていることからすると、鈴木三重吉によって改題され、また作品内容にも三重吉の補訂があったものと想像される。これは、後に「赤い鳥」に掲載された作品「ごん狐」と、南吉の草稿「権狐」とに見られる本文の異同からも十分に首肯されることで、三重吉は、当時の文壇作家の芥川龍之介の作品「蜘蛛の糸」であっても、筆を入れていたほどであった^{（注5）}。

作品「張紅倫」は、先掲の日記に記されているように、「兵士を材料

として、一つ童話でも作らうか」と思っていた南吉の着想によって生まれた作品であるが、この昭和四年二月の日記には、次のような記述が見られるので、再び日記から引用しておこう。

(昭和四年)二月十六日(土) 好

(前略) 半田へ使に行つて、新美書店によつた。「赤い鳥」三月号が出てゐた。頁を繰つて見ると、最後の頁に、来月から休刊すると云ふ事が、鈴吉三重吉の編集後記として出て居た。情ない。「愛誦」も三月号が出てゐた。「愛誦」に投書をしやうと又思つた。

二月十七日(日) 好

(前略) 書肆に過つて、も一度「赤い鳥」を手にとつて見た。「後日の為、愛読名簿を作るから、貴君の住所氏名を報せて呉れ」と記してあつたので、余も名と住所を書いて、報せてやつた。

二月二十一日(木) 曇

(前略)「赤い鳥」から、手紙が来た。頁三十二位の小雑誌を発行すると書いてあつたので、余は、余の心は明るくなつた。

「張紅倫」の原題「少佐と支那人の話」が二月二十一日に執筆が始まつたことは先に掲げた日記から自明のことであるが、右の日記の記述からすると、南吉は二月十三日に「兵士を材料として、一つ童話でも作らうか」と思ったものの、「赤い鳥」の休刊を書店で知り、執筆を躊躇していたものと思われる。そして、二月二十一日に「赤い鳥」からの復刊の知らせを受け、その日から執筆が開始されたであろうことは、日記の記述からしても想像に難くない。「少佐と支那人の話」は、復刊される「赤い鳥」への投稿を目的に執筆されたものであろう。

ところで、童話作家としての新美南吉を考える上では、「張紅倫」は避けることのできない作品と言ってよいだろう。「赤い鳥」に掲載された童話では「正坊とクロ」に続く作品であるが、制作年次では一番古く、

いわば南吉童話の原点に位置付けられるものである。「張紅倫」に比して、「ごん狐」が南吉の代表作として認められ、小学校国語教科書に掲載されたり、児童劇として上演されたりするのは、もっともなことではあるが、南吉の作家としての展開や成長を考える際には、やはり「張紅倫」は、南吉童話の原点であるが故に、無視することのできない存在として認められてよい。

そこで、以下、一般に「ヒューマニズム童話」として扱われている「張紅倫」が、作家南吉を考える上で、どのような位置にあるのか、はたして、従来から指摘されている人間愛、人類愛といったものが作品の主題として認められるかについて、考察を試みることにしたい。そこで、論証に先立ち、作品「張紅倫」の梗概を記すことにする。

二

物語のあらすじは、——日露戦争で陸軍の勝敗を決した奉天大会戦の数日前、日本軍の将校である青木少佐が、歩哨を見廻つて歩くうちに、古井戸に落ちるところから話が始まる。古井戸に落ちた少佐は、誰も助けに来てくれず、数日後、飢えと疲れで眠りに落ちたところを、中国人の農民の父と子に助け出される。その少年が紅倫という名前で、助け出された少佐は父子の住む貧しい家で介抱される。ところが、父子が少佐をかくまっていることを知った村人たちは、少佐をロシア兵に売り渡そうと企てる。それを知った父子は少佐を逃がす。少佐は世話になった礼として懐中時計を少年の手に渡して立ち去る。

数年後、除隊して日本に帰り、都会の会社の上役として勤める少佐のところへ、ひとりの若い中国人の行商が万年筆を売りにやって来る。万年筆を買った少佐は、帰り際に中国人の取り出した懐中時計を見て、中国人がかつての紅倫少年であることに気付く。けれども、中国人は紅倫

であることを否定し、「あなたのようない人、穴に落ちることない」と言葉を残して立ち去る。そして、次の日、会社の少佐宛に、一通の無名の手紙が届く、という内容の話である。

この結末部の手紙の部分は、この作品の主題と大きくかわることがある、次に作品の手紙の全文を掲げておく。

「わたくしは紅倫です。あの古井戸からお救ひしてから、もう十年もすぎました今日、あなたにおあひするなんて、ゆめのやうな気がしました。よく、わたくしをお忘れにならないでゐて下さいました。わたくしの父は昨年死にました。わたくしはあなたとお話したい。けれど、お話ししたら、支那人の私に、あなたが古井戸の中から救はれたことが分るとあなたのお名まへにかゝるでせう。だから、私はあなたにうそをつきました。私は明日は支那へかへることにしてゐたところです。さよなら、おだいじに。さよなら。」

従来、「張紅倫」が異色視されてきたのは、右に掲げた手紙の内容からも知られるように、日露戦争から十年ほど経った大正初期の時代背景の中で、民族差別と階級差別とを作品の主題として明確に打ち出した点が評価されてきたからであった。

例えば、佐藤通雅氏は「人間と人間は手をつなぎ合うように美しく美しく結びつくことはできない、自己を殺すことによって他人を生かす、他人を生かすためには自己を殺す、この可酷な行為によって初めて人間愛を証し、結びつきを得ることができる。そして得た時、すべては終わってしまふ。」と述べて、「自分を抹消することによって少佐のためになる」とする紅倫と、「死によってはじめて善意を証すことのできたこん」は、自己放棄の点で共通する指摘し、そして、さらにこうした南吉の初期作品に見られる構想が、後の「いかにして人間との結びつきを得るか」というテーマ^(注6)へ発展すると説いておられる。確かに、少佐を古井戸

の中から助け出し、ロシア兵に売り渡される前に逃がしてくれた張父子、そして、少佐の社会的地位を考えて、名を明かさずに立ち去った紅倫の思いやりは、「国境を越えたヒューマニズム」と言えるものをもっている。けれども、はたして南吉が作品の執筆当初から、そうした人間の善意性なるものを作品の主題として描くことを考えていたかどうかという点になると、疑問の生ずることもまた否定しえない。

南吉の日記に見られる「少佐と支那人の話」「古井戸に落ちた少佐」という、三重吉によって「張紅倫」と改題される以前の作品の題名からすれば、南吉は、紅倫の思いやりを主題にして作品を書き上げる構想をもっていたとは考え難い。むしろ、それよりも、西田良子氏の指摘されるように^(注5)、大隊長である青木少佐が戦場で古井戸に落ちたという珍事件をシニカルに描くことが作品執筆の動機であったと考える方が正鵠を射ているだろう。

南吉の日記には、先掲の「兵士を材料として、一つ童話でも作らうか。」と記された二月十三日の六日前に、次のような記述が見られる。

二月七日(木) 好

(前略) 大平先生の教練は、前哨の話で、余は歩哨にせられ人形の様に扱はれた。片桐のテツカンさんは、面白い皮肉を云ふ。あれで海軍大佐とか中佐とか云ふ事だ。

半田中学に在学当時、南吉は、日頃から軍事教練の時間を好まず、将校に対しても反抗的であったことが彼の日記から確かめることができるが、右に引用した日記の記述は、「張紅倫」の執筆直前のものだけに特に注目されよう。そして、さらに三月七日の日記には、

試験勉強の為早朝床を出て歴史の本を繰った。それなのに、歴史の試験の成績は余りよくなかった。二番の「露国の満州侵略」にはホト／＼困った。でネルチンスク條約愛琿條約の附近を書いて置い

た。

といった記述の見られることも注意される。「張紅倫」の作品の中に描かれている「奉天大戦争」といった時代設定や、歩哨を見廻るうちに古井戸に落ちた少佐という人物設定は、南吉にとっては、日々の生活体験の作品化であったと言えるよう。

したがって、「張紅倫」は、執筆当初においては、国境を越えたヒューマニズムや、人類愛を描くことに主眼点が置かれていたとは考え難い。むしろ、南吉のねらいは、部下を率い、もっとも勇敢に戦うべきはずの大隊長が、不注意から古井戸に落ち、歴史に残る奉天の戦いの際には、中国人の家で床に伏していたといったパロディ的な作品の展開にあったと言ってよいだろう。それは、昭和十七年に第二童話集『花の木村と盗人たち』の刊行の際、「赤い鳥」掲載の作品を中心にして童話集が編まれたにもかかわらず、南吉は、この第二童話集に「張紅倫」を収めなかったことにも結び付いてこよう。従来、「張紅倫」が第二童話集に収載されなかったことについては、異聖歌氏の

戦時下の日本では、こうした話は利敵行為とまではいかなくとも中国人のヒューマニティを礼讃したことになって、非国民ということになる。こんなことでは敵愾心をあおれない。それで採用は見合わせられたの^(注7)だろう。

とする説が有力視されてきたが信じ難い。それよりも、「古井戸に落ちた少佐」というシニカルな原題が象徴しているように、軍隊に対するアイロニーとして受け取られることを危険視した措置と考えるのが穏やかである。

では、そうした内容の作品が、なぜ「赤い鳥」に採用され、掲載をされたのであろうか。それは、題名が「張紅倫」と改題されていることから知られるように、三重吉は、この作品をヒューマニズムを描くこと

を主題とした作品として享受をしたからに他ならないだろう。そのように受け取られる理由としては、次に述べるような、作品の前半と後半とに、視点の異同が認められるからである。

この作品は、冒頭から一貫して古井戸に落ちた少佐を主人公として、少佐の視点でもって作品が描かれているにもかかわらず、最後の手紙の部分は、明らかに張紅倫の視点でもって描かれている。作品の構成上、重要な位置にある結末部が紅倫の視点で描かれているところからすると、紅倫は南吉の分身であると言ってもよいだろう。殊に、先掲の結末部の紅倫の手紙には、この作品の主題が集約されているとも言える。今の少佐の社会的地位を考慮し、話をしたくとも何も語らずに中国に帰って行く紅倫の手紙の言葉は、完全に南吉自身の言葉である。

すると、この作品の矛盾とも言える視点の変化は、どのように考えたらよいのだろうか。これについて、筆者は次のように考えている。

まず、この作品の執筆当初の南吉は、既述のように、大隊長である少佐が戦場で古井戸に落ち、中国人に助けられるという珍事件をシニカルに描くことを目的に、筆を取りはじめたものと思われる。ところが、作品の完成後、主題はむしろ紅倫の言葉にあり、主人公であった少佐は作者と同様に物語りの語り手にすぎないということから、南吉は作品の主題を変更することを思いついたと言える。換言すれば、表題を改変することによって、作品の視点の矛盾を解決しようとしたと考えられるのである。先掲の南吉の日記に見られる「少佐と支那人の話」から「古井戸に落ちた少佐」という表題の異同は、そうした南吉の側の創作の事情を如実に物語るものと判断される。

また、この「張紅倫」が、従来から民族間のヒューマニティを描く作品として受容されてきた要因に結びつくことがらとして、南吉作品の改作といったこともあわせて考えておく必要があるだろう。例えば、流布

本のひとつである角川文庫『牛をつないだ椿の木』所収の「張紅倫」の本文では、結末部の紅倫の手紙の部分が次のように改められている。

『(前略) わたくしはあなたとお話したい。けれど、お話したら、支那人のわたくしに、軍人だったあなたが古井戸の中からすくわれたことがわかると、今の日本では、あなたのお名まえにかかわるでしょう。だから、わたくしはあなたにうそをつきました。わたくしは、あすは中国へかえることにしていたところです。さよなら、おだいじに。さよなら』(傍点引用者)

右の引用と、先掲の、「赤い鳥」掲載作品を底本とする『校定新美南吉全集』所収の本文とを比較すると、傍点部が大きな異同としてあげられる。これによると、改作された流布本系統の本文は、^(注8) いずれも「軍人だった」「今の日本では」といった文章が加筆されていることから知られるように、本来の南吉作品に比して、古井戸に落ちた少佐の立場を考える紅倫の気持ちにより強調された文章になっていることがわかる。それに加えて、国名の「支那」が「中国」に改められているにもかかわらず、自称表現の部分に関しては、依然として「支那人のわたくしに」というように、旧態のままになっている点も注意される。国名の呼称の異同は、戦後の中華人民共和国の成立に伴う変更であるからして当然のことであるが、紅倫の手紙の部分に関する自称表現のみ旧態のままであるのは、片手落ちとも言うべきものである。これでは、作品の享受者の受け取りによっては、紅倫の卑下表現として理解しかねない処置とも言えよう。

戦後のこのような作品の改作は、南吉のかかわり知らぬことであったことは言うまでもないが、これらの改作が、いずれも作品の主題にもかかわる結末部の改作であるがゆえに、作品の評価にも少なからず影響を与えてきたことは否めない。戦後の改作が『張紅倫』を必要以上に、民

族間のヒューマニティを描いた作品と評価するのに影響してきたと言ってよいだろう。

三

南吉童話の原点に位置付けられ、「ヒューマニズム童話」とか、人類愛、人間愛を描いた作品として評価をされてきた「張紅倫」は、結果的には、人間と人間との心のふれあいを描くことになったが、作品の執筆契機は、そのように意図されたものではなかったことについて記してきた。そのように結論するためには、南吉の日記に傍証の多くを求めるだけでなく、作品自体の分析を通しての結果でなくてはならないことは言うまでもない。今後、そのような点に考察の余地を残すものの、現時点では、既述のように、作品の執筆の動機等を考えるのが穏当かと思われる。けれども、作家南吉の生涯から「張紅倫」の作品的位置を考えるならば、やはり、張父子と少佐との心の交流という点に、作品の評価の視点を求めるべきであろう。

この「張紅倫」に描かれた、その生存所属を異にする者との心の交流は、「ごん狐」での兵十ときつねのごんとの心の交流に照応するものであり、さらには「最後の胡弓ひき」「牛をつないだ椿の木」などを経て、晩年の「きつね」まで持続され、追い求められる南吉の童話の主要なテーマである。その意味では、「張紅倫」は、南吉の十五歳の作品とはいえ、南吉童話のいわば原点に位置付けられるべき内容と主題とを有した作品と言ってよいだろう。

(注1) 浜野卓也氏『新美南吉の世界』、新評論、昭和四十八年六月。

(注2) 昭和三年当時、南吉が存学していた半田中学校の学友会誌「柊陵」に

は、既に「棕の実の思出」(第九号・昭和三年二月発行)、「赤蜻蛉」(第十号・昭和三年十一月発行)といった南吉の作品が掲載されている。けれども、現在のところ昭和三年以前の日記が発見されておらず、これらの作品の発想、執筆に関する資料はない。

(注3) 久米常民氏『書き・書く・書け』、桜楓社、昭和四十六年十月。

(注4) 谷悦子氏『新美南吉童話の研究』、くろしお出版、昭和五十五年十月。

(注5) 西田良子氏『日本児童文学研究』、牧書店、昭和四十九年五月。

(注6) 佐藤通雅氏『新美南吉童話論』、牧書店、昭和四十五年十一月。

(注7) 巽聖歌氏『新美南吉の手紙とその生涯』、英宝社、昭和三十七年四月。

(注8) 代表的なものとして、筑摩書房版『ごんぎつね』所収、昭和二十六年九月。牧書店版『新美南吉全集I』、昭和四十年十二月などがある。